

『#アメリカン・スナイパー (American Sniper)』(2014年、クリント・イーストウッド監督)をNHK BSで視聴した。米国海軍特殊部隊の狙撃手クリス・カイルの人生を描いた『ネイビー・シールズ最強の狙撃手』を原作にしている。北米興行成績は戦争映画史上最高の興行収入額となった。

クリス・カイルはテキサス州に生まれ、厳格な父親から狩猟の技術を仕込まれながら育った。その後、ロデオに明け暮れていたカイルは、米国大使館爆破事件をきっかけに海軍を志願する。30歳という年齢ながら厳しい訓練を突破して特殊部隊シールズに配属され、私生活でも恋人Tと共に幸せな生活を送っていたが、間もなく米国同時多発テロ事件(2001年)を契機に戦争が始まり、カイルもTとの結婚式の場で戦地への派遣命令が下るのだった。

イラク戦争で狙撃兵として類まれな才能を発揮したカイルは、多くの戦果(160名以上射殺)から軍内で「レジェンド」と称賛されると共に、敵からは「悪魔」と呼ばれ懸賞金をかけられていた。テロ組織を率いるZを捜索する作戦へと参加したカイルは1000m級の狙撃を得意とする元オリンピック射撃選手の敵スナイパー「ムスタファ」と遭遇し、以後何度も死闘を繰り広げる。繰り返される凄惨な戦いのなかで親友のBは戦傷により視力を失い、戦争に疑問を感じ始めたLは戦死し、強い兄にあこがれて海兵隊に入隊した弟はイラク派兵で心に深い傷を負って除隊した。同僚や弟が戦場で傷付き、倒れゆく様を目の当たりにし、徐々にカイルの心はPTSDに。戦地から帰国するたびに変わっていく夫の姿に苦しみ、人間らしさを取り戻してほしいと嘆願する妻Tの願いもむなしく、戦地から帰国するたびにカイルと家族との溝は広がっていく。

4度目の派遣でカイルたちは敵の制圧地帯に展開し、ついに防護壁の工兵を射殺したムスタファの姿を捉える。Bへの思いを込めて放った1発の銃弾はムスタファを貫いて敵陣の包囲網を辛くも突破し、宿命の長い戦いはついに幕を閉じる。

除隊して帰国したカイルは、戦地の記憶に苛まれて一般社会に馴染めない日々を送り、戦地でもっと仲間を助けたかったという気持ちを医師に吐露するが、医師は「ここにも助けを必用とする者達がいる」と傷痕軍人たちを紹介する。やがて彼らとの交流を続けて少しずつ人間の心を取り戻し、家族との絆も復活させるカイルだが、ある日に退役軍人社会復帰プログラムの一環として赴いた射撃訓練先で、自分が支援していた退役軍人によって射殺されるのだった。最後、盛大に国民に見送られる葬式場面で映画は幕となる。

監督は『アメリカン・スナイパー』を通じて、何を訴えようとしたのだろうか。戦争を英雄譚として描くのではなく（「戦争を美化するつもりはない」と明言）、兵士が背負う心理的葛藤や家族との断絶を浮き彫りにすること（PTSDや家庭崩壊に苦しむ姿）を意図したと言われている。大ヒットと高い評価を受けるが、一方で戦争賛美か反戦か（「戦争に正義も悪もない」という視点を持ち、戦場の緊迫と家庭の日常の対比を通じて、戦争の不条理を浮かび上がらせる）をめぐって激しい論争を呼んだ。

本作は、戦争の英雄譚とその代償を同時に描いた二面性のある映画である。

イラク戦争（クリス・カイルが派遣された戦争）

米国にとって、サダム・フセイン政権の打倒や「大量破壊兵器の脅威」への対応という名目で始められたが、実際には国際秩序の主導権確保、対テロ戦争の延長、民主化推進の試みなど複数の意義と矛盾を抱えた戦争であった。その結果、米国の国際的信頼は低下し、中東の不安定化を招いたという負の遺産も大きい。

戦争の帰結と教訓

- ・国際的信頼の低下

大量破壊兵器は発見されず、開戦理由の正当性が失われたことで米国の外交的信用は大きく損なわれた。

- ・中東の不安定化

フセイン政権崩壊後の統治は失敗し、宗派間抗争やアルカイダ、後のIS台頭を招いた。

- ・米国の負担増

長期的な駐留（2003-2011年）による甚大な人的・経済的損失は、米国の軍勢力と国民の戦争疲れを深めた。

イラク戦争は、米国にとって「安全保障の強化」と「民主化の推進」という建前を持ちながら、実際には国際秩序の主導権を誇示する試みであった。しかしその帰結は、米国の信頼低下と中東の混乱という逆効果をもたらし、今日でも「必要な戦争ではなく、選択の戦争」と位置付けられている。

評価：★★★★☆